

使う人とともにつくる学びの場

— 学校・図書館からひらくひとつづくり —
 通信教育部 建築学科/造形学部 建築学科 堀部 篤樹



対象校の全教職員を対象にしたWS(基本計画)



授業時間を活用した生徒WS(基本設計)



学校図書館をテーマにした市内全司書WS(基本設計)

1. 公共施設マネジメントの課題と現状

人口減少と少子化・高齢化の進行により、公共施設の維持更新は全国的な課題となっている。老朽化施設の増加と厳しい財政状況の中で、単なる更新ではなく統廃合や複合化が求められている。とりわけ、公共施設の総量縮減の議論においては、施設量・延床面積ともに大きな割合を占める学校施設が主要な対象となっている。一方で、公共施設は地域の拠点としての役割も担っており、効率性だけでなく地域価値の再編という視点が不可欠である。こうした背景のもと、学校を含む公共施設のあり方が改めて問われている。

2. 公立小中学校づくりの課題

児童生徒数の減少により、小中学校の統廃合や適正規模化が進んでいる。あわせて、小中一貫校や義務教育学校など新たな教育環境の検討も進むが、単なる施設再編では教育の質や地域との関係性に影響を及ぼす。学校は学びの場であると同時に地域の拠点でもあり、その在り方が問われている。こうした状況の中で、利用者の視点を取り入れた合意形成と場づくりが重要となっている。

3. 利用者参加型の対話プロセス

計画初期から運用段階まで、各フェーズに応じて多様な利用者の声を丁寧に拾うことが重要である。基本構想では理念共有、基本計画では機能整理、設計段階では具体的な空間検討を行うなど、段階ごとにテーマを設定する(図1)。手法もワークショップ(WS)、ヒアリング、アンケート、説明会を適切に組み合わせ、継続的な対話を設計する必要がある(表1)。

計画案を確認し、より良くしよう!

①全体構成、②普通教室、③職員室

青: いいね↑【期待】
 (理由も書き、具体的に記入してください)

赤: ちょっとし【不安】
 (理由も書き、具体的に記入してください)

緑: どうなる?【疑問】
 (おもしろいところ、具体的に記入してください)

黄: こうすると!【提案】
 (具体的なアイデア、理由も記入してください)

図1. 教職員WSのテーマ(基本設計)

表1. 学びの場をつくる対話プロセス —フェーズと利用者に応じた対話の構造—

利用者	フェーズ	基本構想	基本計画	設計	施工	運用
児童生徒		理想の学校(学習・生活)	学習・居場所	クラスルーム・トイレ	工事見学・体験	使い方・改善
教職員		教育理念・課題	機能・安全	授業・管理	工事影響・運営(授業・行事)	運営改善
保護者		学校への期待	安全安心	使いやすさ	工事影響(動線・安心)	利用実態
地域住民		地域の学校	学校との関わり	地域開放	工事影響(周辺環境)	地域利用
手法		WS・アンケート	WS・説明会	WS・ヒアリング	見学・WS	研修・アンケート

4. 意思決定のプロセスと体制

対話で得られた意見は、そのまま反映するのではなく、行政・設計者・学識経験者が連携して整理・判断することが求められる。その上で、決定した方針や検討過程を「かわらばん」などで可視化し、利用者へ丁寧にフィードバックすることで信頼関係を築く。透明性のあるプロセスが合意形成の鍵となる。

- ① 利用者の声を集める (WS・ヒアリング・アンケート)
- ② 意見の整理・可視化 (設計者・学識経験者)
- ③ 方針の検討・意思決定 (行政・設計者・学識経験者)
- ④ 利用者へフィードバック (かわらばん・説明会・掲示・配簿)
- ⑤ 再び対話へ (改善・深化)

図2. 利用者参加を踏まえた意思決定プロセス



図3. 教職員WS(基本設計)のかわらばん

※ 学校から図書館へ：学びの場の展開 ※

本研究で示した利用者参加型の対話プロセスは、図書館整備にも応用可能である。たとえば基本構想段階では、利用者ワークショップを通じて「滞在のしかた」や「居場所の多様性」を共有し、基本計画では学習・交流・静寂といったゾーニングの整理を行う。設計段階では家具配置や動線を具体的に検討し、運用段階では利用状況を踏まえた改善を継続する。学校づくりで培った対話と意思決定の枠組みは、多様な主体が関わる図書館においても有効であり、地域にひらかれた学びの拠点形成につながる。近年では、学校と図書館の複合化も進んでおり、両者を横断した学びの場の設計が求められている。



図4. 市立図書館づくりWS(1回目)のかわらばん